

# 絲山秋子さんの企画展



高崎市在住の芥川賞作家、絲山秋子さん(54) 顔写真に焦点を当てた企画展が、同市の県立土屋文明記念文学館で開かれている。同館の企画展で現役作家を取り上げるのは珍しい。取材写真や創作ノート、書簡など約150点を展示し、作家と作品の魅力にさまざまな角度から迫っている。

◀取材写真や創作ノート、校正刷り原稿など作品に関する資料や作中の印象的な文章を紹介する企画展



# 地方の生活 深く的確

「仕事のことだったら、そいつのために何だっかってやる。同期ってそんなものじゃないかと思っっていました。006年)では、会社組織や会社員生活を描き、働く女性たちの真に迫った姿が多くの共感を生んだ。」

住宅設備機器メーカーに総合職として12年在職し、病氣療養中の1999年に小説を書き始めた。芥川賞を受賞した『沖で待つ』(2006年)では、「山

との距離感」に触れ、

「夜で真つ暗な時でもあそこには赤城山が、こつちに榛名山があると肌で分かっている感じ。それがすごく落ちてく」と語っている。

地方を小説の舞台に設定し、その土地や登場人物を生き生きと丁寧に描写する『薄情』(15年)は本県を舞台に、高校時代の後輩女

## 創作ノートや写真 書店員との書簡も

### 作品の魅力 多角的に

子や東京から移住した木工職人らとの交流を通して自らの内面を掘り下げていく内容で、16年に谷崎潤一郎賞を受賞。同賞選考委員の桐野夏生さんは「地方都市で暮らす若い男のディテールを書かせたら、彼女の右に出る者はいないだろう」と評している。

企画展は「群馬を描く」「ロード小説」「会社員小説」「距離感」「神様・異世界」の五つのカテゴリーに分け、各作品の印象的な文章と共に紹介している。

「なにもかもが愛しい。そう思うことは一瞬でも、重みは永遠に等しいのだ。同じ場所にいることは、かけがえないことなのだ。」

同館学芸係長の細田亜津抄さんは、『夢も見ずに眠った』(19年)の一節に触れ、「もやもや」として言い表せない感情を、的確に表現している」と魅力を話す。

16年に全国10店舗の書店員とやりとりした手紙も展示され、「降りてくる」の実例をつづった書簡も。フランスのミシェル・ビュートルや志賀直哉ら影響を受けた文学作品、編集者とのやりとりの跡が見られる校正刷り原稿も興味深い。細田さんは「展示をきっかけに一冊でも多く手に取ってもらえるといい」と期待している。

(井上章子)



絲山さんが影響を受けた文学作品や学生時代の写真なども見ることができる

【メモ】「絲山秋子展『土地』で生きる人々を描く」は3月14日まで。午前9時半〜午後5時。火曜、2月24日休館(同23日は

開館)。一般410円など。問い合わせは県立土屋文明記念文学館(☎027・373・7721)へ。